

C型肝炎ウイルス持続感染者に対するウシラクトフェリンの影響

樋上 勝也

東邦大学医療センター大森病院消化器内科



【目的】 ウシラクトフェリン (bLF) は鉄キレート作用を有し、抗菌および抗ウイルス作用も有するとされている。われわれはbLF経口投与によるC型肝炎ウイルス持続感染者 (CHC) に及ぼす影響について検討した。

【方法】 血中HCV抗体陽性かつHCV-RNA(Amplicor Ver2.0通常法)定性が陽性と確認されたCHC 63症例を対象として3種類の検討を行った。①対象のうち36例 (LF群) にはbLF600mg/dayを連日投与し、残る27例には肝庇護薬のみを継続し (Control群)、12ヶ月間、血清中ALT、HCV-RNA量、インターロイキン(IL)-10、IL-18値、CD4陽性リンパ球中IL-4陰性/IFN γ 陽性 (Th1)、IL-4陽性/IFN γ 陰性 (Th2) 細胞の比率を測定した。②LF群の25例には中央値56ヶ月間、bLF600mg/日連日投与を継続し、Control群の25例は中央値55ヶ月間、肝庇護薬のみを継続し、血清ALT、AST、総蛋白 (TP)、アルブミン (ALB)、総コレステロール (TC)、コリンエステラーゼ (ChE)、鉄 (Fe)、フェリチン、末梢血プロトロンビン時間 (PT)、血小板 (PLT) の推移を比較した。③LF群とControl群に対して定期的に画像診断を行い、腫瘍が出現した場合には生検を行い肝癌の出現率を検討した。

【結果】 ①LF群では投与開始3ヶ月後には投与開始前に比べて血清IL-18値は統計学的に有意に上昇したが、Control群では有意な変動はみられなかった。②LF群では血清ALB、TCと末梢血PLT値の低下が抑制されたが、Control群ではこれらの値は有意に低下した。③LF群で発癌はなかったが、Control群では2例で発癌した (2.9%人/年)。

【結語】 ウシラクトフェリンの経口摂取はCHCの肝機能が維持され、肝癌発生が抑制される可能性がある。